しくお願い申し上げます。

日程は、平成17年9月2日（金）に総会研究会を、翌3日（土）に実務者研修会を開催する予定です。例年とは順番が逆になっていますのでご注意下さい。場所は、両日とも国立がんセンター内国際交流会館3階会議場を予定しています。

ご承知の通り、国立がんセンターでは地域がん登録の実務を担当しているわけではありませんが、昨年より第3次対がん総合戦略の中で、地域がん登録の体制整備にかかわる研究班を担当することになりました。そこで、総会研究会のテーマは「地域がん登録の精度向上と標準化」とし、同様の内容でシンポジウムを企画する予定です。特別講演としては、International Association of Cancer Registries（IACR）の President である Max D. Parkin 先生をお招きして、“Standards to ensure quality of cancer registry data”と題してお話しいただき、わが国における地域がん登録の体制整備の強力な後押しをしていただこうと考えています。Parkin 先生は、同月13-15日にアフリカのウガンダで行われる IACR 総会も主催されますので、超多忙な中での来日をお願いすることになりました。講演は英語ですが、和訳したスライドと通訳を準備する予定です。また、最近急速に体制が整備されてきた韓国の地域がん登録を担当しておられる韓国国立がんセンターの Hai Rim Shin 先生にも特別講演をお願いすべく交渉しています。両先生を交えての少人数によるワークショップを9月1日に企画する予定です。

実務者研修会では、多重がんの取り扱い、進行度分類のコーディング、個人情報安全管理措置など、地域がん登録にかかわる実務についての実践的な情報交換の機会を提供できるようにと考えております。土曜日の開催になりますので、東京近郊の地域がん登録に関心のある方々にも是非参加していただければと思います。教育講演では、個人情報保護ガイドラインや、地域がん登録の法的整備に関する話題で講演を企画する予定です。なお例年通り、ポスター発表（優秀ポスターに対する各賞の贈呈）も予定しておりますので、どうか奮って演題を出していただくようにお願い申し上げます。

東京での開催は味気ないと思われるかもしれませんが、ここのところ築地界隈は魚河岸を中心として外人さんも訪れる観光スポットとなっています。会議の前後に、場内、場外市場などにも立ち寄っていただいて、日本の食文化を堪能していただければと思います（残念ながらあまり安くはありません）。第14回総会研究会の開催に向けて、精一杯準備を進める所存でありますので、皆様方ご多数のご参加、ご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

第26回国際がん登録学会(IACR)報告と第27回会議のご案内

伊藤　秀美
愛知県がんセンター研究所　疫学・予防部

第26回国際がん登録学会（IACR）が、中国の北京市において2004年9月14−16日に開催されました。道路を自転車が埋め尽くしているというのがこれまでの中国の大都市のイメージでしたが、今の北京では自転車は端の方に追いやられ、それに代わりおびただしい量の自動車が傍若無人に走り回っていました。北京に交通ルールは存在していないのかもしれない、と錯覚するほどでした。渋滞も想像以上で、学会が主催した北京オペラ観劇のために北京市内を移動しただけで2時間以上かかり、オペラを半分しか見ることができなかったのには驚きました。高度成長まっただ中の北京の北部に位置する会場（北京国際会議場）に、約38カ国から約200名の参加者が集まりました。日本からは14名が参加いたしました。

主題は、“Promoting Cancer Registration in the Developing Countries & Enhancing Cancer Prevention and Control throughout the World”で、発展途上国のがん登録の現状やスクリーニング戦略、リスク要因、一次予防、頭頸部がんの疫学、職業とがん、肝がんと予防、など様々な内容で8つのセッションがあり盛りだくさんでした。肝がんのセッションでは大阪成人病センターの津熊秀明先生が基調講演、それに続いて同センターの田中英夫先生が口演をなさいました。印象に残ったのは、フィンランドの Dr. Hakama 先生の発表で、すべてのスクリーニングプログラムにおいて地域がん登録がデザインを供給し、様々なデータを集め、それらを評価する、といった内容でした。スクリーニングプログラムは無作為化試験での評価のみならず、プログラムの導入後がん登録でモニターしていくことが大切であるといったとても教科書的な内容でしたが、日本でもがん登録から得られたデータが国のがん対策へ結びつけられる時代が近い将来くるかしら？

と思いながら（必ず来ると思いながら）聞いておりました。オーストラリアの Dr. Burton 先生もがん対策におけるがん登録の重要性を理解されている方でした。もうひとつ、印象に残ったのは、またフィンランドからの発表になりますが Dr. Sanklia の発表で、がん登録のデータから抽出した小児がん患者の治療後の学力の評価をしたものでした。結果そのものよりもがん登録システムがこのような疫学研究に役立つレベルのものであるということに感銘を受けました。まさにがん登録の教科書通りだ、理想のがん登録がここにある、と感じました（一方では、我が国の都道府県並みの人口規模に対してうらやましくも思いましたが）。

ポスター発表は、90 弱のエントリーがありましたが、実際に掲示されていたのは4分の3くらいで、少々寂しい感じでした。日本からは9題の発表があり、生存率に関するものが半数以上でした。また筆者の発表も含めて3題は、発展途上国のがん登録のグループに分類されていました。日本は発展途上国ではないけれどがん登録的には発展途上国だ、という意味なのでしょうか。ポスターに対しては、毎年恒例の表彰がありました。実は私はこのポスター表彰ショーが学会での一番の楽しみです。前理事長であるデンマークの Dr. Storm の軽快なおしゃべりと楽しいプレゼンテーションは本当に必見です。今回、たまたまポスターを選考している場面を見学することができたのですが、選考員の方たちが一番楽しそうにポスターを隅から隅まで、重箱の隅をつつくようにして審査しているのが印象的でした。今回は、日本から阪大の伊藤さんのポスターがプレゼンテーションで紹介されましたが、惜しくも賞を獲得することはできませんでした。

今回はアジアでの開催ということで、学会終了後にアジア地方会が開催されました。詳しくは早田先生から報告があると思いますが、こちらもとても活発な議論が展開され有意義な会でした。こういったアジアの地方会も情報交換という意味で 1–2 年に一回くらいのペースで開催されるといいと思いました。

さて、次回の第 27 回国際がん登録学会は、アフリカ大陸のウガンダで 2005 年 9 月 13 日から 15 日に開催されます。この学会の魅力のひとつは、学会でなければきっと行かない国へ行ける事だと思います。学会は首都カンパラ近郊のエンテベで開催されます。会場はビクトリア湖のほとりの自然の豊かなところのようです。外務省の海外安全のホームページによると、首都カンパラは＜十分注意してください＞で、レベル 1（安全）から 5（危険）のレベル 2 に相当します。これを危険ととるか安全ととるかは皆様にお任せしますが、多くの参加を期待いたします。

アジアのがん登録のための IACR サテライト会議の報告

早田　みどり
放射線影響研究所疫学部

2004 年 9 月 16 日、IACR 会議 3 日目の午後、北京の国立がん研究所・病院会議室において、アジアのがん登録関係者が集まり、がん登録とがんの制圧に関する特別会議が開催された。大島明先生が企画し座長を務められたこの会には、カンボジア、中国、インド、イラン、日本、韓国、タイ、パキスタン、フィリピン、スリランカから多くの研究者が参加した。

IACR の会長である Dr Max Parkin の基調講演に続き、アジアの 6 カ国の代表者が各国のがん登録の実情とがんの制圧についての講演を行った。時間的な制約から、討論の時間が充分でなかったが、参加者は興味深く演者の話に聞き入り、アジア各国のそれぞれの経験やアイデアを交換する貴重な機会に恵まれた。以下にその概略を述べる。

中国　（Dr Zhao Ping, Dr Yuankai Shi）

Dr Zhao は、サンプルサイズが小さくても、国のがん罹患のパターン分析は可能であり、適切ながん制圧プログラムを構築できる事を示した。

現在、中国には約 50 のがん登録が存在するが、そのうちの約 2/5 は CI5 の基準を満たしており、がん登録の精度向上へ向けた努力が強調された。診断、治療、生存率の向上を目指した情報収集の為に、2006 年までに 10 都市の 10 の院内がん登録が立ちあがる予定である。

2006 年には、2003－2005 年の死亡を調査する第 3 回全国調査が実施される予定である。国立がん予防・制圧機関は、死亡統計ソフトを提供する。

地域がん登録は標準化されたデータ収集を行う。入院患者の臨床データ、診断、治療、生存データが標準化されたソフトを用いて記録され、国の公衆衛生情報システムに入力される仕組みである。